

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）

金屋光彦

# 命輝くフォトグラフ

## —いじめ考 その6—

### 1 13歳の命

「突然でごめんなさい。ストレスでもう生きていけそうにないです」

「いじめてきたやつら、自分でわかると思います。もう、二度といじめないでください」

青森市の中学2年生だった葛西りまさん（当時13歳）が、苦しい心の叫びをこう遺書に残し自ら命を絶ったのは、2016年8月の暑い夏の日のことだった。

りまさんはこの年、青森県黒石市で行われた夏祭り「黒石よされ」の写真コンテストで、市長賞に選ばれたモデルである。肩越しに拡げた真っ赤な和傘をバックに、踊る喜びにあふれる笑顔、そこに浮かぶ朱い口元、額に巻いた赤いハチマキも鮮やかに舞うその姿には、13歳の命の輝きがはじけている。軽やかさと艶やかさとも滲む写真の主人公は、この10日後に鉄道自殺を遂げるのである。

### 2 年々高くなる若年層の自殺率

2012年まで毎年3万人を記録した自殺者数が、2万1,764人（2016）までに急減した。ところが、中高生の自殺者は343人（2015）を数え、これは前年比10%増の過去最多だった。

さらに15～24歳までの自殺率でみると、日本は2000年以降先進主要国（G7）の中で、毎年最も高い数値を示している。他の欧米諸国が年々減少傾向なのに反し、日本は逆に上昇の一途を示しているのだ。これは、一体なぜだろうか？

私が推測するに、その背景の第一は、日本の若年層が持つ自尊心や自己肯定感の低さがあると思う。国際比較の自尊心の調査をみると、ここ最近ずっと日本の青少年たちが欧米諸国の若者に比べて、最も低い結果となっている。また、東京都の調査によると、学年が上がるにつれて自尊心は徐々に下がり、中学2年前後で最低レベルに至っている。この日本の若者の自尊心の低さは、一体どこからくるのだろうか？

この若年層の自殺の多さや自尊心の低さに大いに関係してくるのは、いじめの問題である。なぜなら、いじめというものは、いじめられる者の自尊心を激しく損うばかりでなく、いじめる者も、自尊心の傷つきを負っている場合がほとんどだからである。

### 3 いじめの様相

葛西りまさんの父親は、いじめがなくなり、このような悲劇が二度と起こらないことを願って、実名公表に踏

み切られた。また、りまさんが映る写真コンテスト受賞も、一度取り消されたが、多くの心ある市民らの抗議等によって、当初の決定通り市長賞が受賞されたのだった。

りまさんへのいじめは、中1の6月頃から始まったという。

彼女は、中1で生徒会の会長を務める一方、バレーボール部で活動するも途中からは美術工芸部へ移った。この間に受けた言葉の暴力は、ひどいものだったようだ。

「お前を見ると目が腐る」、「オカメ、見捨てられて当然、嫌なら死ね」等といった暴言や、LINEでもあらぬ噂をたてられ、人格攻撃もされていたという。このような「罵り」「中傷」の類のいじめが、1年以上の間執拗に続けられたのだった。

長期にわたる悪口が自殺の原因とみた青森県警は、「容姿や人格を否定する言葉の暴力によって、りまさんの名誉を傷つけた」として、児童相談所に非行（触法）の事実を通告した。加害生徒たちが家裁送致になるかどうか、今その判断が待たれている。14歳未満は刑罰を問えないための異例の措置だが、事態の悪質さと深刻さを物語っているといえよう。

いずれにせよ加害生徒たちは、りまさんの死と向き合い、自らの行為とその意味を、深く内省する必要がある。彼らは、自らが犯した言葉の暴力の重なりによって、一人の少女の心をズタズタに切り裂き、生命さえも奪ってしまったという重い目を、一生の重荷として背負いながら生きていかなばならない。

### 4 遺書のつづき

「家族へ。先立つ不孝を許してください。もう無理です。特別虐待があったわけでもない（中略）。文章めちゃくちゃでごめんなさい。

みんなに迷惑かけるし、悲しむ人も居ないかもしれないくらい生きる価値本当にないし、綺麗な死に方すらできないけど、楽しい時もありました。本当に13年間ありがとうございました。～」

心優しい美しい少女は、生き抜くことがかなわなかった。

いじめ自殺は誰をも不幸にする。浮かばれるものは、誰一人としていない。このいじめによる悲劇は、今も全国各地で発生し止まる気配は見えない。これを防ぐ有効な手立てが、今喫緊に求められている。